

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: comm.tko@nskkn.org

PHONE: 03-3433-0987

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



怖れの中にタラントンを隠すのではなく

司祭 ニコラス 中川 英樹

マタイ福音書第25章には、イエスがユダヤ教の宗教指導者たちと対論したエルサレムの神殿を後にして、オリブ山に登り、そこからエルサレムの街々を見渡ししながら、弟子たちに向けて語った三つの喩え話が収められています。一つは「10人のおとめの喩え」、もう一つは「タラントンの喩え」、そして「すべての民族を裁く」がそれぞれです。福音記者聖マタイは、これら三つの喩え話を語り終えて、イエスが十字架の道へと歩み出して行ったことを記します。キリストの教会もまた、これらの喩えを聞き終えて、新しい暦へと歩みを進めます。年間主日の終わりの期節、ここでは「タラントンの喩え」を取り上げますが、これは聖霊降臨後第23主日に読まれる福音でもあります。

主人は、旅に出かけるに際し、その財産を3人の僕たちに、それぞれ5タラントン、2タラントン、1タラントンずつ預けました。5タラントン預けられた僕は、それを用いて、さらに5タラントンを得、2タラントン預けられた僕も、その2タラントンを置いて2タラントンを得るので、1タラントン預けられた僕だけは、地面に穴を掘り、その中に1タラントンを隠しました。



1タラントン預けられた僕がなぜ主人の財産を地中に埋めて隠したのか。その理由について福音記者聖マタイはこう記しています。「ご主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められるので、恐ろしくなり、出て行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。」この僕は、主人のことを残酷で厳しく、情け容赦のない人であると理解していたようです。そうした、主人に対しての「怖れ」が、この僕をして、タラントンを隠させたのでした。しかし、主人として描かれる神については、神自らが「あわれみ深く恵みに富む神、忍耐強く、いつくしみとまことに満ちている」と語るように、神は厳しく心の狭い方ではなく、愛と優しさに溢れた方です。その神が、愛と優しさを生きるようにとタラントンを預けるのです。この「タラントンの喩え」は怖れではなく、信頼を生きることの尊さを物語っています。

怖れは、いつも人を硬直させて、多くの場合、誤った選択をさせます。怖れは、踏み出そうとする足をすくませ、前に進み行く気力を奪い、安全で確実なところに、逃げ込むよう人を誘います。そして、怖れは疑いを生み出します。多くの分断と懐疑に覆われた、今の社会にあって、わたしたちは、自らが批判され排斥されることに怯え、誤りと偏りに対し沈黙し、正しいことを語ることに、行うことに怖れを感じています。それは1タラントンを地中に隠した、臆病な僕の姿に重なり、必要なのは怖れではなく信頼です。神の愛としてのタラントンは、怖れではなく信頼のうちにならなければなりません。イエスは、その生涯の終わりのときに、この喩えを通して、怖れと疑いの中をではなく、神への信頼に生きるようにと語り遺しました。信頼はわたしたちが新たな道を歩み、歩いていくための力です。神の愛によって生きる「わたしたち」こそが、神にとっての、この上ない「喜びのタラントン」であること。そのことを、わたしたちはいつも忘れずに、つねに正しいことを語り、行い、神からのタラントンを活かし増やすことのできる者で在りたいと願います。

夏のキャンプ特集

中高生世代キャンプ

スタッフ 須賀 瞳

主の平和がありますように。「東京教区中高生代キャンプ準備会」では、長野県のシャロームロッジでキャンプを行いました。コロナ禍以降としては2回目、13人のキャンパーと、7人のスタッフ、2人のチャプレンで向かったキャンプでした。

今回のキャンプは、「聴くことと伝えること」というテーマをもとに、分かち合いや聖書研究、運動会などの多彩なプログラムで構成しました。中でも、多くのキャンパーが特に印象に残っていると話していたのが、キャンプナイトです。このプログラムでは、一人ずつ神様に祈りを捧げながら、キャンドルに火をともしていきます。一人ひとりの祈りには、様々な思いが込められており、その願いを他の参加者は静かに受け止めます。まさに「聴くことと伝えること」であり、話すのが苦手な子も、じつと聞くのが苦手な子も、相手のこと、自分のことを静かに祈る時間となりました。私はキャンパーとしてキャンプに3回参加したことがあ



ります。どの年にも、キャンプの参加者には、キャンプがなければ知り合うことはなかっただろう人が多くいます。

今回は、キャンパーやスタッフたちに、共通点は決して多くありません。イエス様を通して、初めて結ばれたのです。4日間のキャンプを通して、こんなに仲良くなれる。それがキャンパーの私には、ずっと不思議でした。ですが、スタッフになり、その理由が少しわかったように思います。それは、直向きに「聴くことと伝えること」を続けているからです。分かち合いや聖書研究を通して、私たち参加者は様々な意見を聞き、伝えます。誰かの意見も、自分の意見も大事にするという、大切な考えがあるからです。だからこそ、安心して中高生たちは自分の意見も言葉にでき、相手の考えが理解できなくとも、受け入れることができるのです。



様々な人々が神様のもとに集まって、キャンプをする。私にとって、キャンプで培った人間関係は、宝物のようなものです。今回のキャンプが、キャンパーたちにとって良い経験になった

ら、と願います。

キャンプに参加して

中2 酒井 要

今回、自分は初の中高生世代のキャンプ参加だった。自分としては教会歴は長くないが、教会に貼ってあったキャンプのチラシを見て参加を決めた。

初日、聖アンデレ教会から出発するときには、数人としやべることができた。

ロッジに着いた時はいくら長野といっても、かなり涼しかった。また、ロッジの場所が写真で事前に見たよりも森の中という感じではなく、ただ広々としていた。ロッジの中はすごくきれいで、

ロッジの周りにピザ窯やサウナなどの施設があることに驚いた。初日の活動に「アイブレ」というプログラムがあったが、これはみんなと仲良くなるためのものであり、そのとおりにスタッフやキャンパー、色々な人としやべり遊んだ。

話は少し変わるが、ロッジのご飯は毎日豪華ですごくおいしかった。2日目の朝、気持ちよく目覚めることができた。朝の祈りをして、ものづくりをした。ものづくりは、翌日に行

われる運動会に向けてチームでオリジナルTシャツをつくった。チームごとに、みんなと話し合っって協力したのでこれでよりみんなと仲良くなったと思う。運動会では、みんな白熱バトルを繰り広げてとても楽しかった。このようにたくさんさんのプログラムがあったが、自分が一番気に入ったのが、「分かち合い」である。これは、あるテーマに沿って自分達の意見を発信する場である。自分としては、ここでしか発信できないものを、最高の仲間と分かち合うことができた。

今回自分が一番うれしかったことは、外で礼拝することができたことである。2日目、3日目と、午後の天気荒れていたため、全てのプログラムを無事にできて本当によかった。最後に、自分は絶対に来年も行きます。誰でもすごく楽しめるこのキャンプは、いい経験ができる場所です。これを読んで、キャンプに来た人も、来ていない人も、みんな、「また、いつかキャンプで逢いましょう!!」

（東京諸聖徒教会）

小笠原プロジェクト2023

堂脇 良介

おがさわら丸を降りて埃の積もった下宿に戻った今もなお、からだは波に揺られ続けています。

丸一日前、私は父島を発つたのでした。小一時間前に筐のような葉っぱを編んでつくった下手くそなレイを海に舞わせ、船を送りに港に押し寄せた島の方々にぎこちなく手を振ります。澄んだ海に消えたあのレイにこもった意味が、無事戻ってくるという祈りだったと思い出して、それでも私には別れの実感湧いてきませんでした。別れというものが、切実に感じられなかったのかも知れません。この島にも、ここで出会ったひとにもまたすぐ会える、どこかそんな気がしていたのかもしれない。

父島はあたたかい島でした。こ
とばかりそうでした。英語まじりのそのことは、いろいろなことばをもつ人々が絡まり合
い、ほどけ、結び直して、そうして紡がれてきた小笠原の歴史
そのものであるように思いました。主
日礼拝の日、聖ジョージ教会に集った
信徒さんの出自だつてさまざまにみえて、欧米系や南洋系、日本系といった
人々をすつぽり受け入れている。そう
したふところの広さが、小笠原のあた



たかさを織りなしているのだと、そう
思いました。

そんなあたたかさに、つい数日前に島にやってきたばかりの観光客もまた、織り込まれていくのでした。交通手段がわずかな船と村営バスに限られたこの小さな島で、私たちは一人のひとと二度、三度、巡り合うのです。そうした人たちと、私たちは目配せし、ことばを交わし、ときには膝を突き合わせるのでした。私たちはもはや、すれ違うだけの他人ではありませんでした。すでに小笠原のなかに、ともに編み込まれているかのように思えました。

小笠原では、ひとも、ことばも、幾度となく絡まり合つていくのでした。結んでは離れ、ふたたび結ぶ、そんな場所には思いました。もしかしたらそんなのは、波に揺られて夢見心地の私が見たまばろしに過ぎないのかもしれない。それは私が小笠原に見た夢に過ぎなくて、ほんとうはすぐには再会など叶わないのかもしれない。それでも、もう少し、夢を見ていたいと私は思うのでした。

(東京聖アモテ教会・同志会学生寮)

『聖公会』の全国青年大会で得たもの

小貫 和

私はクリスチャンホームに生まれ、幼児洗礼を受け、小学4年生で友達と一緒にノリで堅信も受けました。私には同じ世代の遊び仲間もいて、楽しく教会に通っていた一方で、教会に馴染めない人、教会から離れて行く人が何人もおり、寂しさと同時に諦めのようなものを感じていました。そんな私の教会生活の中



で、神様と出逢う時は、いつも人と出逢う時でした。私の最も衝撃的な神様との出逢いは、聖公会の信徒の方との出逢いの時にありました

が、若者の信仰に影響を受けたのはほとんど他教派の人からでした。信仰に熱い若者が多い他教派に対して、教会から若者が離れていく聖公会は何が足りないのか、最近よく考えています。私は、聖公会の良い所は、(私もノリで堅信を受けてしまったように)多くのことに寛容であることだと思っていました。一方、寛容であるが故に個々の信

徒(特に若者)の信仰を育てる面でも緩くなってしまう、信仰の喜びでなく楽しい行事などでしか若者を惹きつける事ができていないじゃないか、と少しマイナスなイメージを持っていました。そしてそれは私に、高慢で人を裁いてしまう心をもたらしました。

そんな中、全国青年大会に参加しました。今回参加していた青年は、教会に毎週通っている人もいれば、あまり行っていない人、最近行き始めた人、教会自体初めてだという人など、様々でした。教会に馴染みのない人が教会について知らないのは当然だとして、あまり行っていないことを当然のように話したり、毎週通っているが信仰については聞かないで欲しい、というようなスタンスの人、信仰のことはわからんけど、なんとなく教会つてあったかいよね、と言う人たちに対して、どうしても黒い感情を抱いてしまう自分がいました。しかし分かち合いの中で、イエス様ならどんな人でも愛しているし、教会から離れて行く人の隣をも歩人が寄ってきたのか、と気付かされました。私も、自分の弱いところを全部知っていてくれて、それでも愛してくれる神様が、イエス様が大好きで、何度も救われているということをおぼす事ができました。教会のために何か

《日本聖公会アーカイブ》
東京教区100年の歴史より③

しているから偉いのではなく、信仰を持つているから愛されるのではない。むしろ、医者が必要とするのは病人であったことを思い出す事ができました。ご飯も美味しく、ノンクリスチャンの人にも福音を思いつきり伝えることができ、またアホなことでもできる。トークセッションや分かち合いでは多くの気づきがあり、プログラムの時間でなくとも深い話を1時間以上でできる。自分の目の中の丸太に気づく事ができ、また感謝すべき多くのことにも気づく事ができた、そんな青年大会でした。

東京教区成立50周年を祝う

神戸教区主教 中道 淑夫

私は、私のように人を裁くのではなく、人の弱さを受け入れるイエス様のようなあたたかい聖公会が大好きです。これからは、イエス様がしてください。くださったことを忘れるたびにイエス様に立ち帰り、人の弱さを受け入れ、人を愛する中で、若者も信仰の喜びのうちに生きることができるような、そんな聖公会を作る一端を担っていきたいです。

(聖マーガレット教会)

今回は今から50年前、教区成立50周年を記念した教区時報(1973年10月発行)に寄せられた神戸教区主教の中道淑夫師の文章を再掲したいと思います。

「私は青年時代の3年間、東京で学生生活を過ごした。昔から今に至るまで東京で学生生活をした人の数は多い。そう言う人にとって、東京の町は、心のふるさとである。多くの青年に



中道淑夫主教の年という。この年には、すべての借金は帳消しにされ、奴隷は解放される。つまり原点にかえる年である。そして新たな飛躍を試みることをゆるされる年である。

よき思い出を与えると言うことが、東京と言う特殊な都市の精神的使命であると思う。東京教区も信仰生活という面で同じ使命を荷っていると思う。

東京教区発足の年に関東大地震が起った。東京市が全滅した程の災害であった。しかし東京教区は、つぶれなかつた。

災難にもめげず、東京教区は歩みを進めた。東京・大阪両教区の成立の

事情は、それ以外の教区の場合と根本的に違ったところがある。すなわちこれら二教区は、自らの実力によって成った教区であると言う事である。それだけに他の諸教区の模範として、全国信徒の期待は大きいと思う。

50年という年数には、聖書的な意味がある。7日目を安息日と言うように7年目を安息年と言う。この7年が7回くりかえされたのちの年は50年目であるが、これは大きな

安息の年でヨベルの年という。この年には、すべての借金は帳消しにされ、奴隷は解放される。つまり原点にかえる年である。そして新たな飛躍を試みることをゆるされる年である。

東京教区のすべての人の心にヨベルの喜びが満ちあふれ、その願いと祈りが、新たな霊的力となって、神の支配がますます広まってゆくであろうことを確信する。...

この時から50年、東京教区はどのように歩みを進めてきただろう。この100周年が新たな飛躍を試みる年になることを願う。

【司祭の召命】

子ロバの召命 vocation of the colt 弱さのための黙想

作成鍾著
よはく舎2023年刊
執事 藤田 美土里

皆さんは黙想の経験はおありでしょうか。今回ご紹介する本は、主に召された聖職者、準備の時を過ごす聖職候補生、聖職を志す方々へ向けた黙想のテキストです。ここでは「王であるキリストの主日」と呼ばれる降臨節前

主日に読まれる福音書、ルカ19章28〜38節が選ばれています。イエスのエルサレム入城の際、馬ではなく子ロバが用いられたということは皆さんもよくご存知でしょう。主に用いられた子ロバから黙想が導かれていきます。子ロバに象徴されるのは、汚れ、未熟さ、低さ、鈍さ。参加者は自分と子ロバを重ねながら、ゆつくりと自身の信仰や召命に目を向けみ心を求めていきます。更に、聖書時代この地域における子ロバの用いられる馬は権力や戦争に用いられる馬は権力や財力を表し、ロバは平和な営



み、日常生活のために用いられたことが語られ、イエスが示しているのは平和と救いの成就であることに気づかされます。導き手が様々なエピソードを語ることで黙想がより具体的に深められていきます。聖職者の召命が黙想のテーマですが、このことは信徒にとっても重要なテーマと言えるでしょう。

一昨年の12月、私は執事按手式を前に作成鍾司祭にナザレ修道院での黙想を指導して頂きました。その際用意されたテキストがこの本の下敷きになっていて、と伺っています。学問的な知識を頼りにみ言葉に耳を傾けるだけではなく、黙想を通してみ心を求めるよう導いてくださいました。霊的養いの必要性が見過ごされ勝ちな現代において、この本は黙想の重要性を知る手がかりになるでしょう。黙想の方法はひとつではありませんが、初代教会からキリスト者の霊性を支え続けてきた黙想、霊的読書を知り、身近に溢れる神のメッセージに気づく機会が与えられますように祈ります。

インマヌエル新生教会の今

司祭 卓 志雄

東京教区の中で地理的に近く、親しい交流を育んでいた池袋聖公会、東京聖マルチン教会、練馬聖ガブリエル教会が合同して、2019年1月にインマヌエル新生教会が誕生しました。また聖公会の伝統と斬新の調和が香る新礼拝堂は、2021年8月に完成しました。聖堂内の聖具や調度には、3教会に由来するものが多く使われていま



すが、「新生」を象徴するようにすっかり新聖堂に駆け込んでいます。

一見、インマヌエル新生教会の営みが完成されたように見えますが、一つの「通過点」を通っただけです。今もわたしたちは歩みをつづけています。

公禱はコロナ禍以前に戻

りつつあります。また「夕の黙想会」を6月から再開しました。毎月第4水曜日19時から行われる「夕の黙想会」は月に一度、各自がその日の働きを終えようとする夕に集まって、日常の忙しさから少し離れて神のみ言葉に静かに耳を傾け、神の息

吹きを感じ、自らへの休息を得る集まりです。

そして旧池袋聖公会が1971年から大事にしてきた「敗戦記念日祈祷集会」の精神をインマヌエル新生教会が受け継ぎ、2022年から

は「平和を祈る日」として毎年8月15日に近い日曜日に行っています。今年は、神によって造られた尊い人間の命が、踏みじられていたミャンマーの現状を知り、在日ミャンマー人を覚えて共に心と両手を合わせました。このようにインマヌエル新生教会は「安定的な礼拝を行

い、祈りを献げる」ことを絶え間なく目指しています。

また「地域の人々に仕える」ことを大事にしています。教会が母体となっている「ボーイスカウト(練馬第5団)」は地域の子どもたちの育成に力を注いでいます。また在日ミャンマー人の集まりである「ビルマ集会(BIC)」も当教会を拠点として活発に活動しています。さらに地域で支援を必要としている方々に、教員、ボーイスカウト保護者、その他有志の皆様からの寄付で集めた品々を、無料でお持ち帰りいただき、食事を共にする「わかちあいマルシェ」を定期的に開催し、地域に仕えています。

ここまでの道程を共に歩んできた日本聖公会の祈りの仲間のお支えに感謝します。

ここまでの道程を共に歩んできた日本聖公会の祈りの仲間のお支えに感謝します。



「ぶどうのいえ」から

お便りいたします

記録的な酷暑の季節も過ぎ去り、待ちわびていた涼やかな秋の日々が訪れています。お陰様でぶどうのいえも創設から28年を数え、「難病とたたかう子どもと家族のための滞在施設」の運営活動を通じて、細やかながらも社会

貢献の働きを続けてきました。

この間、東京教区をはじめ日本聖公会の諸教会、信徒の皆様からの懇切なご支援をいただき誠に有難く、一同深く感謝いたしております。

しかしながら、

ぶどうのいえも「新型コロナウイルスウイルス」の感染拡大による休業や運営活動の制約もあり、現在でも財政面の苦しさは残っています。幸い、ボランティアの皆様のご支援や温かなご寄付のご支援助もいただき、活動面では通常通りに復帰しています。

これまでも、難病の



子どもとご家族への滞在施設の提供を中心としつつ、成人の患者様やご家族にもその範囲を拡げてきました。が、今後はさらに「臓器移植」のような滞在期間が長期となるケースにも対応できるよう、検討していきたいと思っています。

今後はともぶどうのいえは、滞在者の皆様にとって単なる宿泊施設ではなく、滞在することでも心身共に安らぎ、励まされる場所となるよう、スタッフ一同努力して参ります。

つきましては、東京の病院への入院、通院、検査、治療等で宿泊先をお探しの方がおられましたら、是非「ぶどうのいえ」を、ご紹介下さい。

「ぶどうのいえ」のご利用に関する条件や手続き、各種の情報等については、下記の「QRコード」からご確認ください。

お待ちしております。

認定NPO法人ぶどうのいえ

理事長 大隈 廣





りが豊かになることを願っています。

清里での宣教協議会開催も近づいて参りました。今回は前回第6号の続きとして、

宣教協議会のプログラムの中からいくつか紹介いたします。

「宣教協働区アワー」

このプログラムは、東日本宣教協働区、中日本宣教協働区、西日本宣教協働区ごとに分かれて時間を過ごします。内容については各宣教協働区の協働委員の皆さんに考えて頂きますが、この時間の前に、主日聖餐式を献げ、主教会からのメッセージをお聞きする予定です。日本聖公会総会で宣教協働区制への道を歩むことをご提案された主教会からのメッセージを思い巡らしたり、これまでなかなかお目にかかることの出来なかった協働区のメンバーと一緒に昼食を食べながら、出会いと交わ

「清里コール」(仮称)

今回の宣教協議会の集大成でもあります。何か「宣言」というような形式ではなく、「呼びかけ」のような形式でまとめていきたいと考えていて、私たち実行委員会では仮に「清里コール」と呼称しています。2022年に開催されたランベス会議でも「ランベスコール」という呼びかけが成されておりそれからヒントを得ました。宣教とは、神様が主体となって進められている、神の国の成就を目指す絶え間ない働きです。私たちはこの働きに招かれています。

そしてその招き(コール)は今の時代、そしてそれぞれ状況においてどのような変化してきているのか、私たちはそれを机の上で考えるのではなく、10年の実りを持ち寄り、私たちのあゆみ物語を聴き、いのちの現場で働

かれている5人の講師の皆さんからお話を伺い、そしてグループに分かれて思いを分かち合うことよって神様からの呼びかけ(コール)に応えていきたいと思えます。11月の宣教協議会に至るすべてのプロセスが「清里コール」へとつながっています。

コールについてのイメージですが「難しい言葉を使わない」「強制されるものではなく、非難の対象とされるものでもなく、教会の宣教を主体的に担っていくきっかけとなるもの」、そして何よりも大切にしたいことは清里コールによって皆が励まされ、元気になる内容にしたいと思っています。皆さんお一人お一人の心に響くものが出来まようにと願っています。

「礼拝について」

宣教協議会を支える礼拝について最後に紹介します。礼拝はセーフチャーチワーキンググループ、祈禱書改正委員、青年の皆さんに協力を頂き豊かな祈りの時間を持つ予定です。神様の御声に耳を傾け、となりびとのために代

祷を献げ、聖歌を賛美する事も神様からの呼びかけに応える大切な時間です。

コロナ禍を経て開催されようとしている宣教協議会で、清里に実際に集まる参加者のみならず、主を信じる信仰の仲間と一緒に神の国への呼びかけに応じて参りたいと思います。いくつかのプログラムは配信も予定されています。

どうぞ皆様、お祈りください。そして、宣教協議会に関心を寄せて頂きますようにお願いいたします。



(司祭 越山 哲也)

日本聖公会宣教協議会に向けて

福澤 眞紀子
「宣教協議会」という名称自体が「なんだそりゃ??」とイメージし難いものかもしれないませんが、私たちはそれが自分ごととなった時、理解しようと考え始めます。東京教区から現地参加者として

派遣される8名も、大きな不安とともに考え始めてくださいました。宣教協議会に臨む全ての過程を通して、私たちの内と外で既に働いておられるキリストを見つめ、出会いは、開かれていくことを求め祈ります。

東京教区の宣教協議会準備会は、8月末までに4回開かれました。初めの2回は過去の宣教協議会について、相原太郎司祭(中部)、太田信三司祭をお招きして話を聞きました。前回の2012年宣教協議会で出された「日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言」について考え取り組むことが日本聖公会の教会と教区に与えられた宿題で、10年経ったら、「新型コロナの影響で1年延期されました」が、その実りを持ち寄ることになっていました。そこで、第3回目からは東京教区の11年間の「宣教・牧会の実り」を考えました。この間、提言が一貫して吟味され、意識されてきたとは言えないかもしれませんが、それでも、参加者が個々に所属する教

会や施設、委員会の『今』ある出来事を出し合うと、教会や関連諸機関が、東京の各地域や、個人、社会に奉仕し、祈りや交わりを努めてきた事が見えます。個からグループ教会に範囲を広げて集められた具体的な事柄を、自分たちの言葉で分類すると、

「いのち・食」「こども」「学び」「礼拝」「地域」「交わり」となりました。これらの事柄が蜘蛛の巣のように繋がって見えた時、参加者の間に小さな光が灯りました。この準備会で、東京教区の教会全ての宣教・牧会の実りを完全に網羅できないことを予めお詫びしますが、是非、各教会、各グループで、皆さん自身の言葉で「宣教・牧会の実り」を語り合ってください。

教区の「宣教・牧会」についても、東日本大震災支援、教区90周年の出来事、教区再編準備室の働き、教役者の霊的養い、青少年活動支援や小笠原聖ジョージ教会の宣教・牧会などを振り返ります。いのちの尊厳に関わる問題は益々必要性を増しました。教

会そのものが形を変えて新しく生まれたり、使命を終えた所もありました。新型コロナウイルス禍で公祷休止を余儀なくされ、それでも教会はあり続けました。今年、東京教区は成立から100年です。イエス運動2000年分の100年です。

11月の宣教協議会を通じてもう一度、日本聖公会の新たな展望が見えることを期待しています。それはコンパスのように、私たちのゆく道を指し示すものであるようにと願います。宣教協議会のプログラムは配信されどこからでも視聴参加でき、全ての人が招かれています。「なんだそりゃ??」のその先を、皆さま一緒に進んで参りましょう。

宣教という言葉との距離

高橋 牧

「宣教」という言葉に、何度も躓いてきた。教会の中でも「何をもちて宣教というのか?」という議論が折に触れて展開され、信徒にとつては特に、「宣教」を具体的な行

動で示すことのハードルは非常に高いように感じてきた。

今秋の宣教協議会「いのち、尊厳限りないもの」となりびととなるために」への参加が、所属する礼拝音楽委員会からの推薦で決まった時、そのテーマから連想されるような社会的奉仕の場との接点がほとんどなく、また礼拝・音楽という限られた現場での働きに留まっている一信徒の立場で、社会への「宣教」が語られるであろう場に目的意識を持って臨めるのか：不安しかなかった。「教区の『宣教の10年の実り』を持ち寄る」という宿題にも、ポジティブなイメージは正直浮かばなかった。

8月初旬に参加メンバーでの対面ミーティングが叶い、「宣教とは命への奉仕。イエス様の営む様々な命の奉仕に私たちも参加するという動詞である」という高橋主教の言葉から、私たちなりの「宣教」「実り」の捉え方を率直に語り合った。狭い世界と感じていた、礼拝とそれを支える音

楽は、『主とともに行きましよう』と社会での働きへ派遣される私たちの命に欠くことのできない養いであり、教会と世の中のことを繋ぐ大切なもの、と皆で確認できたことに励まされ、徐々に心がほぐれていった。

前回の協議会に参加された太田信三司祭の「教会の営み、日々の小さなことの中に、『実り』—そこに神様が働いたという証—を見つけることが大事」というアドバイスにも大きな気づきを頂いた。個々の教会の豊かな営みと思いに触れる中で、神様によって既に蒔かれているたくさんの種があることに希望を感じている。

準備会のプロセスで分かち合えていることや協議会での経験を、個人に留めることなく教区内で共有し、次に繋いでいこうという共通認識も得て、共に歩み出せている感覚がある。

「宣教」という言葉との距離は少しずつ縮まっているようにも思うが、もう一步、乗り越えたい。

《信徒リレーエッセイ》

明日もとことん

八王子復活教会

中山 玲子

皆さん、全盲の人の目の前ってどんな景色が広がっていると思いますか？多くの方は「暗闇」と思いかもしれません。実は失明した原因により十人十色です。先天性の目の奇形により徐々に視力を落とし、2009年に完全に失明した私の今の目の前は朝も夜も真昼のように明るく、白・青・緑・ピンク・黒などの得体のしれないものが動いている幻視の世界です。私が最後には2007年4月の私の受洗日の朝でした。その翌日には太陽が虹色に見え、まぶしさを感じられなくなるほど視力が一気に低下しました。そのとき私は「物体の光ではなく、神様の光を頼りに生きなさい」という主のみ声を感じました。全盲であることでもちろん悔しさもあるけれど、「本当の光」を頼りに明日もとことん歩く神様の子どもでありたいです。

GFS世界会議 南アフリカ大会報告

去る8月3日から11日まで、南アフリカ共和国のヨハネスブルグにて、GFS世界会議が開催されました。3年毎に開かれる会議ですが、2020年はコロナ禍で中止となり、対面での開催は6年ぶりでした。日本GFSからは、会長の雨宮春子さん、ナショナルチャプレンの木村夕子司祭、ジュニア代表の吉野礼(よしのらい)さんが参加。参加国は25カ国で、約半数がアフリカ諸国でした。会議では各国GFSの活動報告、世界GFSで支援するワールドプロジェクトの選定のほか、次の3年間の活動目標などについて議論されます。詳しい報告はGFS新聞をご覧ください。

東京教区GFSは、世界会議担当として、募金の受付やカントリールポートの作成に協力。多くの方にご支援いただきましたことに、心より感謝申し上げます。ジュニア代表吉野さんが感想をお寄せくださいました。

東京教区GFS支部長 林直子(月島聖公会)

日本聖公会GFSジュニア代表

吉野礼

今夏南アフリカにて開催されたGFS世界会議に日本のジュニア代表として出席してまいりました。会議は、1週間近く行われ、世界各国のGFSが直面している問題について活発に議論が交わされていきました。特に金銭的な問題についてはどの国も頭を悩ませていたようで、限られた資産をどのように活用してGFSの活動を大きくしていくのか、特に新興国で活動を続けるGFSに対してどのような形で支援を行なっていくべきか、かなりの時間を割いて議論が行われました。

いわゆる先進国と呼ばれるアメリカやオーストラリアそ

して日本から、新興国に対してどのような形で経済的な支援を継続していくべきかについて、重点的に話し合いの時間が持たれました。参加者からは、ただ資金を拠出するのではなく、例えば新興国のGFSで行われているスキルアップ活動での成果物を、支援者である先進国に対価として提供するなど、いずれ新興国が自力でGFSの活動を行っていきけるように資金を活用すべきではな



いだろうかとの提案があり、資金援助の形についても考えさせられたように思います。今回の会議中、私はカントリールレポート、国ごとの活動報告のお役目をいただき、過去数年の日本でのGFSの活動について世界の皆さまに報告してまいりました。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、思うように活動できなかった近年でしたが、私たちGFSの一員でもある笹森田鶴主教さまの按手について、世界のリーダーたちにお伝えすると、会場からは喜びの歓声が上がりました。この喜ばしいニュースを世界の皆さまにお伝えすることができました。を非常に光栄に思います。また、笹森主教さまだけでなく、GFSのリーダーが各国で女性の聖職者として活躍していることを知るこ

とができ、非常に嬉しく感じました。

今回の世界会議参加を通して、日本および世界各国のGFSが共通して抱える問題についてもお知ることとなりました。どの国においても、メンバの高齢化、若年層の減少は大きな問題のようです。幼

いときに活動に参加していても、成長すると活動に來なくなってしまうとの声も聞かれました。私自身、若いリーダーとしてGFSにどのような形

で貢献していけるのか、どのように繋がり続けていけるのか改めて考えるきっかけとなりました。

最後に、今回の世界会議参加に際してご尽力くださった方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

(札幌キリスト教会)

次回クリスマス号

12月24日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (五十七)

1. 潤滑油

信徒A「この前、うちの牧師にどうして説教の前にジョークを入れるのか聞いてみたんだ」

信徒B「なんて言ってた」

信徒A「それは説教の前に、みんなの気持ちをリラックスさせるための潤滑油なんだって」

信徒B「なるほど、それでよくすべってるんだね」

2. 安息日を破ると

信徒A「神様は十戒で安息日を制定し、みんなが休めるようにしたんだ」

信徒B「それを破るとどうなるの」

信徒A「安息日違反は大きな罪として裁かれることになる」

信徒B「なるほど休まなかっただけに、求刑(休憩)を告げられるというわけだ」

3. 敬老会

信徒A「この前の土曜日、教会の敬老会があって、みんなから司会担当の私に盛り上げてくれと頼まれたので、大いにみんなまで歌って踊って楽しくその場を盛り上げたんだ」

信徒B「それはよかったじゃない」

信徒A「そうでもないよ」

信徒B「どうして」

信徒A「次の日曜日にほとんどのお年寄りが、筋肉痛と腰痛で礼拝を休んだんだ」